

良寛と貞心尼の愛

—貞心尼筆『蓮の露』訳考—

和田 浩

本稿は、平成十八年四月十六日（日曜日）に坂出市の万葉会館で開催された第十五回万葉短歌大会で行った講演（良寛と貞心尼—相聞と挨拶の間で—）の原稿に加筆したものである。

私が初めて良寛さん縁の越後の地を訪ねたのは、今から三十二年前、昭和四十九年の冬のことである。昼頃、地藏堂という駅を降りて、小さな商人宿に荷物を置き、バスとタクシーを乗り継ぐかして国上山の国上寺にお参りし裏山を散策などしてから、五合庵、乙子神社草庵を訪ねて、下山した。帰り道は、適当な乗り物もなく、ひたすら歩いた。夕闇が迫ってくるころ、稲架木（はざき）というのであろうか枝を伐り取られた貧相な並木が田んぼの畦道に延々と続いているのを横目で見ながら、無事地藏堂の旅宿

に辿り着けるのかどうか心細い思いに駆られながら、良寛さんの托鉢行について考えたりしたのを覚えている。

翌日、出雲崎を訪ねたとき、路傍に「良寛さんのようになろう出雲崎町教育委員会」という大きな看板があるのを見て、良寛さんの出家の次第などについていささかの知識を有する者として複雑な思いがしたのも印象に残っている。爾来、折に触れて良寛さんについて思いを巡らしてきたのであるが、ここでは、その時良寛記念館で買った貞心尼筆『はちすの露』の写植本（野島出版）をテキストとして訳考を試みるものである。

さて、良寛さんは、われわれにとって常に懐かしく慕わしい人物として思い起こされる、日本の歴史上五指に入る存在ではあるまいか。しかしその世界は広大深遠で端倪すべからざるものを感じさせる。良寛さんについて、あるいはその書、その詩、その歌などについて書かれた書物も多く、現在もまた陸続として新書の刊行がなされているが、それらを差し置いて何を言うのもおこがましく、また、先学のすでに究め論ぜしところの指弾あるを恐れもするのである。がしかし、若き頃より良寛さんに心引かれ、やがて良寛さんの晩年に近き歳になろうとしている己に気づくとき、何がしかの言を弄するをあるいは良寛さんも堪忍してく

ださるものとも思う。そこで、ここでは敢えて晩年の良寛さんと貞心尼の愛を主題として取り上げ、『蓮の露』における二人の唱和歌に焦点を当てた訳考を試みるものである。

良寛さんのこういう一面がもっと重要視されてよいのではないかともしひそかに思う故である。

一 『蓮の露』前書き

この前書きは、貞心尼による師良寛の生涯の総括であり、簡にして要を得た良寛の紹介文ともなっており、けだし名文とするに恥ずかしくないものと思われる。以下小段落ごとに口語訳する。

○良寛禪師と聞えしは出雲崎なる橘氏の太郎のぬしにておはしけるがはたちあまりふたつといふとしかしらおろしたまひて備中の国円通寺の和尚国仙といふ大徳の聖のおはしけるを師となしてとしごろ所々に物し給ひしとぞ

●良寛禪師と申された方は、出雲崎の橘氏のご長男でいらっしやうたが、二十二歳の時に頭を丸められて、備中の国の円通寺の和尚で国仙という高德の僧がおいでになられたのを師として、

長年あちこち回行なされたという。

※良寛は出雲崎の名主職、姓は橘苗字は山本なる名家の長男として生まれ、幼名を栄蔵と称した。父山本以南の跡を継ぐべく一九歳にして名主見習いとなるや、直ちに己に適性無きを思い知り、出奔し縁の禅門光照寺に身を投じた。これはよくよくのことであつたと思われる。そして、たまたま備中円通寺の国仙和尚が諸国巡行の途次立ち寄られたのに随行して遠行することとなつたのである。

なお、備中の国の円通寺は倉敷市玉島柏島に現存してあり海近い景勝の地である。寺域内には良寛の辞世の歌とも言える「形見とて何かのこさむ春は花山ほととぎす秋はもみぢ葉」を刻んだ歌碑や彫刻良寛托鉢像などが観光用に設置されている。「童と良寛像」なる巨大な石像もあるが、無名の修行僧としてのここにおける良寛の日々を思うとき、さすがに鼻白む思いを禁じ得ない。閑話休題、いずれにしても良寛は、この円通寺において、師国仙和尚から「良や愚の如く道転た寛し 騰々任運誰を得て看しめん」なる印可を授かり、翌年和尚の死とともに寺を出て旅に出るのである。時に三十四歳。

○又世に其名聞こえたる人々をば遠こちとなくあまねくたづねとぶらひて国々にすぎやうし給ふ事はたとせばかりにしてつゝるに其道の奥きはめつくしてのち故里にかへり給ふといへどもさらにすむ所を定めずこ、かしこと物し給ひしが後は国上の山にのほりみづから水くみたき木をひろひておこなひすませ給ふ事三十年とか

●また、世にその名が知られている人々を遠くも近くも遍く訪問して諸国で修行なされること二十年ほどついに仏道の奥を究めつくして後、故郷にお帰りなされたのであるが、なお棲む所を定めずあちこちと行かれていたが、後に国上山にのほり棲んで、自ら水を汲み薪を拾って精進なされること三十年とか。

※良寛三十八歳の時、父山本以南が京都において自死したこともあつてか、三十九歳で越後に帰り、翌年から国上山の五合庵に住み、後脚の衰えと共に少し麓に近い乙子神社の草庵に移るなどして、六十九歳まで過ごすのである。

○島崎の里なる木村何がしといふものかの道とくをしたひて親しく参りかよひけるがよはひたけ給ひてか、る山かげにたゞひとり物し給ふ事いとおほつかなうおもひ給へらる、をよそに見過ごし

まゐらせむもこ、ろぐるしければおのが家ゐのかたへにいさ、かなる庵のあきたるが侍ればかしこにわたり給ひてむやよろづはおのがもとより物し奉らんとそ、のかし参らするにいかゞおほしけん稲ぶねのいななどのたまはずそこにうつろひ給ひてよりあるじいとまめやかにうしろ見聞えければぜじも心安しとてよろこぼえ給ひしにそのとしよりむとせといふ年の春のはじめつかたつるに世を去り給へぬ

●島崎の里の木村某という者が、良寛禪師の道徳を慕つて、親しく出入りしていたが、(良寛禪師が)お年を召されてこのような(草深い)山陰にただ独りでお住まいになられていることがたいへん心もとなく思われるのを、他所事に見過ごし申し上げるのも心苦しいので、自分の屋敷の片隅にささやかな庵で空いているのがありましたので、そこにお移りください、全て自分の方からいたしますからとお勧め申し上げたところ、どのようにお思いになられたのか、否ともおっしゃられず、そこにお移りになられてから、主(木村某)がたいへんねんごろにお世話申し上げたので、良寛禪師も心安らかであると喜びになられたのであったが、その年から6年目の春の初めのころ、ついにお亡くなりになられたのであった。

※貞心尼が良寛に初めて会ったのが文政九年（千八百二十六年）で、良寛が木村家に世話になるようになってから一年後のことである。時に貞心尼二十九歳。貞心尼は寛政十年（千七百九十八年）越後長岡藩士の娘として生まれ、十七歳で医家に嫁いだが五年後に不縁となり、実家に戻って出家し尼となっていたのである。思えば、良寛と貞心尼の出会いから死別するまで、その期間には僅か四年である。

○かく世はなれたる御身にしもさすがに月花のなさはすてたまはずよろづの事につけ折にふれては歌よみ詩つくりて其こゝろざしをのべ給へぬ。されど是らの事をむねとしたまねばたれによりてとひまなびもし給はずたゞ道の心をたねとしてぞよみいで給ひぬる。其うたのさまおのづから古しへの手ぶりにてすがたこと葉もたくみならねどたけたかくしらべなだらかにして大かたのうたよみのきはにはあらず。長歌みじかうたとさまま有が中には時にとり物にたはぶれてよみすて給へるもあれどそれだによの常のうたとは同じからず。ことに釈教は更にもいはずまた月のうさぎ鉢の子しらかみなど詠み給ふもあはれにたふとく打ずしぬればおのづから心のにごりもきよまりゆくこゝち南せらるべし。此道に心あらん人此うたを見る事をえてこゝろにうたがふ事あらずば何

のさいはひか是に過んや。

天保むつのとし五月のついたちの日に 貞心しるす

●このように俗世を離れた御身であっても、やはり月花の情はお捨てにならず、よろずのことに付け、折に触れて歌を詠み、詩を作りて、そのその志を述べなされた。しかし、これらのことを主となされていないので、誰と（特定の）師によって問学もなされずただ仏道精進の心を種として歌を読み出されていた。その歌の様は自ずから古の手振りで、姿、詞も巧みではないが、丈高く調べなだらかで、並みの歌詠みの分際ではない。長歌、短歌とさまざまある中では、時に応じ物に戯れて詠み捨てなされたものもあるが、それさえ世の通常の歌と同じではない。釈教の歌は言うまでもなく、また月の兎、鉢の子、白紙など詠まれているのも、しみじみと尊く思われ、声に出して誦じれば自然心の濁りも清められていくような気がするようである。この道に心ある人がこの歌を見ることが出来て、心に迷うことが無ければこれ以上の何の幸いがあるろうか。

※良寛の歌は良寛調ともいふべき独特の魅力を持っているのであるが、それがまた万葉調と通ずるものであることもよく言われて

いる。貞心尼もその趣をよく理解し、またその由来をここで解き明かしている。しかし、貞心尼の歌にそれが影響を与えているかというに、その歌の調べにおいては貞心尼は不肖の弟子であつて少しも良寛を学び得ていないとは、吉野秀雄の厳しい批評であるが、その可否は二人の歌の唱和において検証したい。

○さればかゝる歌どものこ、かしこにおちりて谷のうもれ木うづもれて世にくちなんことのといとをしければこゝにとひかしこにもとめてやうやうにひろひあつめまたおのれが折ふしかの庵へ参りかよひし時よみかはしけるをもかきそへて一まきとなしつ。

こは師のおほんかた見とかたはらにおき朝ゆふにとり見つゝ、こしかたしのぶよすがにもとてなん。

天保六年五月一日に 貞心尼しるす

●それでこのような歌々がここかしこに散逸して埋もれて世の中に朽ち果ててしまうのもたいへん惜しいので、あちこち訪ねもつめて少しづつ拾い集め、また、自分が折々禅師の庵に参り通つた時に詠み交わしたものを書き添えて一巻とした。これは師の御形身と座右に置いて朝夕に手にとって来し方を偲ぶ縁にもしよう

いうことで（まとめたものである）。

天保六年五月一日に 貞心尼記す

※師良寛の死を看取つて、一念発起し数年をかけてそのその詠草を渉猟蒐集し座右の書とする。まことに、知性と愛情の深さなくしては叶わぬことと、貞心尼への敬愛の情を禁じ得ない。

二 良寛と貞心尼 その人柄の一面

良寛と貞心尼の交流と歌の唱和を考えるに際し、二人の人柄にある種の共通性があり、それが二人を師弟の情愛を超えて結びつけているように思われる。ここでは、二人の歌から、その一端を窺つてみようとするものである。

良寛におくる四首（良寛の自問自答の歌）

○ 粥二合業三合をませくはせ五合庵にぞ君は住むなり

● 粥二合に己の宿業三合を足し混せて五合庵にお前は住むのであるよ

かへし

○ 自今以後納所は君にまかすべし二合三合の分けのよろしき

返歌

● 今からは台所のやりくりはお前に任そう二合三合の分け加減がよろしいので

またかへし

○ 君とわれ僅かの米ですんだらば両くはん坊と人はいふらむ
いざさらばわれもこれより乞食せむ借宅庵に君は御座あれ

また返歌して

● お前と私が僅かの米で済んだならば二人とも飯を食わない坊主（良寛坊）と人は言うであろう。

● さあ、それではわたしもこれから托鉢乞食にでかけよう借家であるこの庵にお前は座っておられなさい

盗まれし品々をよめる歌（盗難に遭った時の貞心尼の歌）

袈裟、衣

○ しらなみのよるの嵐に立入りてけさはころもの一つだになし

袈裟、衣

● 白波（盗人）が夜の嵐に家の中まで入ってきて今朝は衣の一枚も残っていない

からかさ、かっぱ

○ いづくかへさしてゆきけむ雨の夜にぬすみにきたるかっぱか

らかさ

唐傘、合羽

● どこかへさして行ったのであろう雨の夜に盗みに来た合羽と

唐傘を

ちようちん

○ 提灯を何の為とや盗みけむ闇をたよりのわざをしながら

提灯

● 提灯を何のために盗んだのであろうか闇を頼りにするお勤めをしながら

たび

○ いそちかみあまもとまやに白波のたびたびいらばいかにして

まし

足袋

● 磯が近いので漁師（海人・尼のかけ）としてもとま屋に白波

が入るように盗人がたびたび入ったらどうしたものか

※これらの歌に見られるように、良寛と貞心尼は、人生の困難事あるいは人生そのものを時として諧謔化してしまうような心の強さやゆとりを、その性格的一面として共通して持っていたように

思われる。このことは、二人歌の唱和を見ていく上でも、踏まえておきたいことである。

三 『蓮の露』に見られる歌の唱和

『蓮の露』には、前書きの後に、短歌六十七首、長歌十二首及びその反歌十一首並びに旋頭歌四首が所載されており、それに続けて以下の唱和歌が記されているのである。また、唱和は良寛と貞心尼の二人だけでなされたのでないが、『蓮の露』においては、良寛とその弟山本由之とのものが薬味のごとく挿入されているだけで、ほとんど良寛と貞心尼のやりとりで終始しているのはけだし自然のことであろう。

○師常に手まりをもて遊び給ふとき、て奉るとて 貞心尼
これぞこのほとけのみちにあそびつ、つくやつきせぬみのりなる
らむ

御かへし
つきて見よひふみよいむなやこゝのとをととおさめてまたはじ
まるを

●師はいつも手まりで遊ばれると聞いて差し上げる（歌）ということで

ほかでもないこの仏の道に遊び学びながらついてもついても尽き
ない仏の道の奥深さなのであらうと思われまます。

ご返歌

手まりをつけてごらんさい一・二・三・四・五・六・七・九・十と
納めてまた一から始まるのです

※良寛と貞心尼の交際の始まりとなる歌の贈答である。良寛六十九歳、貞心尼二十八歳。ここで良寛の歌に「ひふみよ・・」という数が読み込まれていることに留意したい。良寛の歌における数は、量やそれに伴う情景・風趣（例えば「五月雨や大河を前に家二軒」）を表すものではなく、至純な魂の表象とでもいえるべきものとして用いられているのである。

○はじめてあひ見奉りて
きみにかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬゆめか
とぞおもふ

御かへし
ゆめの世にかつまどろみてゆめをまたかたるもゆめもそれがまに

まに

●はじめてお会い申し上げて

師にこのようにお会いすることのうれしさもまだ覚めずに続いている夢かと思われま

ご返歌

本来夢であるこの世にしばしまどろんで見る夢を語るのもそれ自体が夢であるのもあれこれ別せずすべて自然にまかせておきましよう

※前年訪ねたときは、良寛がたまたまか故意にか他出していて会えず、今回やっと念願かなって憧れの良寛さまに会えたうれしさが貞心尼の歌には素直に表出されている。それに対し、良寛はこの世のことはあなたとの出会いも含めて全て仮のもの。自然の流れのままに行きましようというような、ゆとりを持った返歌である。

○いとねもごろなる道の物がたりに夜もふけぬれば 師
しろたへの衣でさむしあきのよのつきなかなぞらにすみわたるかも

されどなほあかぬこ、ちして 貞

むかひゐて千よもやちよも見てしがなぞらゆくつきのこととはずとも

御かへし 師

こころさへかはらざりせばはふつたのたえずむかはむちよもやちよも

いざかへりなむとて 貞

たちかへりまたもとひこむたまほこのみちのしばくさたどりたどり

御かへし 師

またもこよしばのいほりをいとはずばすすきをばなのつゆをわけわけ

●大変心のこもった仏の道の語り合いに夜も更けてしまったので 師

白妙の衣の袖も寒く思われて秋の夜の月が中天に澄み渡っていることよ

しかしなおも満ち足りない心地がして 貞

向かい合って座っていつまでもお顔を見ていたい空を行く月のよ

うに黙ったままでも
ご返歌 師

心さえ変らなかつたら（這う蔦のように）絶えることなく向かい
合おういついつまでも

それではお暇しようということで 貞

ひとまず帰ってまたお訪ねしましょう道の芝草を辿りながら

ご返歌 師

またお出でなさい柴の庵を嫌でなかつたら薄尾花の露を分けな
ら

※ここでは、貞心尼の一途さに良寛が戸惑い、また帰り道の心配
するような二人の関係が窺える。

○ほどへてみせうそこ給はりけるなかに 師

きみやわするみちやかくる、このごろはまでどくらせどおとづれ
のなき

御かへし奉るとて こは人の庵に有し時なり 貞

ことしげきむぐらのいほにとぢられてみをばこころにまかせざり

けり

やまのはのつきはさやかにてらせどもまだはれやらぬみねのうす
ぐも

御かへし 師

みをすて、世をすくふひとますものをくさのいほりにひまもと
むとは

ひさかたのつきのひかりのきよければらしぬきけりからもやま
とも

むかしもいまもそもまことはれやらぬみねのうすぐもたちさ
りてのちのひかりとおもはずやきみ

●しばらく経ってお便りをくださった中に 師

あなたが忘れたのか道が（草木で）隠れてしまったのかこのごろ
は待てど暮らせどお出でがありませんね

ご返歌を差し上げるといふことで これは人の庵に身を寄
せていた時のことである

あれこれ雑事の多い庵に閉じ込められて身を思うに任せないこと
です

山の端の月は清かに照らしておりますがまだ晴れやらない峰の薄
雲のように私のこころにも迷いがございます

ご返歌 師

身を捨てて世を救う人もおられるのに草の庵におりながら暇を求
めるとは何事です

（空高くある）月の光が清らかなので世界を遍く透らしてしぬいてい

るよ唐も大和も

昔も今も嘘も真も晴れやらない峰の薄雲が立ち去った後の光とこの月影を思わないですかあなたは

※これらの歌のやり取りには、良寛の貞心尼への積極性が強く感じ取れるとともに、二人の間に何らかの心の行き違いやそれから来る迷い、拘りのごときものが有ったように推察される。次の唱和はそれを乗り越えた後の二人の心の高揚が感じられて、多作である。

○はるのはじめつかたせうそなたてまつるとて 貞

おのづからふゆの日かすのくれゆけばまつともなきにはるは来にけり

われも人もうそもまこともへだてなくてらしぬきけるつきのさやけさ

さめぬればやみもひかりもなかりけりゆめ路をてらすありあけのつき

御かへし 師

あめがしたにみつるたまよりこがねよりはるのはじめのきみがおとづれ

てにさはるものこそなけれのりのみちそれがさながらそれにあり

せば

御かへし 貞

はるかぜにみやまのゆきはとけぬれどいはまによどむたにがはのみづ

御かへし 師

みやまへのみゆきとけなばたにがはによどめるみづはあらじとぞおもふ

御かへし 貞

いづこよりはるはこしとぞたづぬれどこたへぬはなにうぐひすのなく

きみなくばちたびももたびかぞふとをづ、とを、も、としらじを

御かへし 師

いざさらばわれもやみなむこゝのまりとをづ、とを、も、としりなば

いざさらばかへらむといふに

りやうぜむのしゃかのみまへにちぎりてしことなわすれそよはへだつとも

御かへし 貞

りやうぜんのしゃかのみまえにちぎりてしことはわすれじよはへ
だつとも

声韻の事をかたりたまひて

かりそめの事とおもひそこのことはこのはのみとおもほすな
きみ

御いとま申すとて 貞

いざさらばさきくてませよほとゝぎすしばなくころはまたも来て
見ん

師

うきぐものみにしありせばほとゝぎすしばなくころはいづこにま
たむ

あきはぎのはなさくころは来て見ませいのちまたくばともにかざ
さむ

●春の始め頃便りを差し上げるといふこと 貞

自然に冬の日数が経って行くと待っているといふのでもなくて春
が来たことです

自分も他人も嘘も真も隔てなく照らしぬいてくれる月の清けさよ
目覚めると闇も光も無い全ては夢のできごとその夢路を有明の月
が照らしているばかり

ご返歌 師

この世に満ち溢れる宝玉より黄金より春の始めのあなたの訪問が
待たれる

手に触れるものは無いけれど仏法の道はそれがそのままそれであ
るなれば

ご返歌 貞

春風に深山の雪は解けたけれど岩間に淀んでいるよ谷川の水は

ご返歌 師

深山のほとりの雪が解けたならば谷川に淀む水はあるまいと思
います

ご返歌 貞

いづこから春は来たのと尋ねるけれど答えない花にただ鶯が啼き
かけています

あなた様がおられなかったら千度百度数えても十を十回足したの
が百だということが分からなかったと思います

※百は十を十回足したものだといふのは、人生的問題を考える場
合、本質は単純明快であることを言っているのだから。

ご返歌 師

さあそれではわたしも止めましょうこの鞠つきを十を十回足したのが百であるとあなたが理解したのであれば

それでは帰ろうというときに（師）

霊山の釈迦の御前で契ったことを忘れずな離れていても

ご返歌 貞

霊山の釈迦の御前で契りましたことは忘れません離れていても

声韻のことをお話なされて（師）

かりそめのことと思えますなこのことは言葉のことだけのことと

思っではいけませんあなたは

※貞心尼は美貌ではあったが、声には恵まれず、読経も聞き苦しかったと伝えられている。言葉の調べを命の調べとして重んじる良寛さんの忠言はそのこととも関わりがあると取るのは、あるいはあなたがちすぎであろうか。

お暇を申しあげるといふこと 貞

それではお暇いたしますが仕合せよくいらしてください不如帰が囀るころにはまたやって参りましょう

師

浮雲のようなわが身であるので不如帰が囀る頃はいつでもあなた

を待つことになるでしょうか

秋萩の花が咲く頃はお出でて御覧なさいそれまで私が元気であつたら共に秋萩の花をかざして遊びましょう

※浮雲の比喩は住いの定めなさのみでなく寿命の覚束なさはかなさを含蓄させたものであろうことが、秋萩の歌の「いのちまたくば」の言葉からも判る。

○されど其ほどをもまたず又とひ奉りて 貞

あきはぎのはなのさくころをまちどをみなつくさわけてまたもきにけり

御かへし 師

あきはぎのさくをとをみとなつくさのつゆをわけわけとひしきみはも

●しかしその秋の頃を待たないでまたお訪ね申し上げて 貞
秋萩の花の咲く頃を待ち遠しく思つて夏の草を分けてまたも来てしまいました

ご返歌 師

秋萩の咲くのを待ち遠しいと夏草の露を分けながらわたしを訪ね

てきてくれたあなたよ

※この唱和はまぎれもなく深い信頼と愛に結ばれた男女間の相聞の歌と言ってよいであろう。

○あるなつの此まうでけるに何ちへか出給ひけん見え給はず
ただ花がめにはちすのさしたるがいとほひて有ければ
貞

きて見ればひとこそ見えねいほもりてにほふはちすのはなのたふ
とさ

御かへし 師

みあへするものこそなけれ小がめなるはちすのはなを見つし
の
ばせ

●ある夏の頃師を訪ねて参りましたときに、どちらへかお出
かけになっておられるのであらうお見えにならずただ花甕
に蓮を挿してあるのがたいそう咲き匂っていたので 貞
来てみるとお姿は見えないけれど庵の留守をして咲き匂っている
蓮の花の尊いことよ

ご返歌 師

特に見るべきものはありませんがせめて小甕の蓮の花でも見なが

らわたしを偲んでくださいよ

※他出する主の留守をすること甕に生けてある蓮の花の風情が
眼に見えるようで、『蓮の露』の中でも印象的な一段である。

○御はらからなる由之翁のもとよりしとね奉るとて
ごくらくのはちすのはなのはなびらによそひて見ませあさで小ぶ
すま

御かへし

ごくらくのはちすのはなのはなびらをわれにくやうすきみがじむ
つう

いざさらばはちすのうへにうちのらむよしやはづとひとは見る
とも

●ご兄弟(弟)の由之翁のもとから布団を差し上げるとい
うことよ
極楽の蓮の花の花びらによそえて御覧なさいこの麻の布団を
ご返歌

極楽の蓮の花の花びらを私に供養してくださるあなたの神通力よ
さてそれでは蓮の上に乗りましたよ仮令(蓮の上の)蛙(のよう
である)と人は見ようとも

※弟由之から蓮の花模様布団を贈られたときの唱和で、貞心尼と直接かかわりの無い一段であるが、蛙に自分をよそえるなど、良寛の即妙の諧謔性が表れている。この後、唱和の形でない短歌三首が記されて、次の段に移る。

○ある時与板の里へわたらせ給ふとて友どちのもとよりしらせたりければいそぎまうでけるに明日ははやことかたへわたり給ふよし人々なごりをしみて物語り聞えかはしつ打とけて遊びけるが中にきみはいろくろく衣もくろければ今よりからすところまうさめと言ければげによく我にはふさひたる名にこそと打笑ひ給ひながら

いづこへもたちてをゆかんあすよりはからすてふ名をひとつくれば

とのたまひければ 貞

やまがらすさといゆかば子がらすもいざなひてゆけはねよはくとも

御かへし 師

いざなひてゆかばゆかめどひとの見てあやしめ見らばいかにしてまし

御かへし 貞

とびはとびすゞめはすゞめさぎはさぎからすところすなにかあやしき

日もくれぬれば宿りにかへり又あすこそはとはめとて

いざさらばわれはかへらむきみはここにいやすくいねよはやあすにせむ

あくる日はとくとひ来給ひければ 貞

うたやよまむてまりやつかん野にや出でむきみがまになしてあそばむ

御かへし 師

うたやよまむてまりやつかむ野にやでむころひとつをさだめかねつも

●ある時与板の里へお出でになられるということを友達のところから知らせがあったので急いで参りましたときに、明日ははや別のところにいらつしゃるといふことで人々が名残を惜しんで語り合った。打ち解けて遊んでいるうちに、師は色が黒く、衣も黒いので、今から鴉とこそ申し上げようと言ったところ、師は実によくわたしに合っている名前であるよと打ち笑われながら 師

どこへなりと発つていこう明日よりは鴉という名前を人が付けて

くれたので

とおっしゃったので

山鴉が里にお出でになられるのならば子鴉も連れて行ってくださ
いよ羽が弱くとも

ご返歌 師

連れて行くのはそれは構わないが人が見て怪しく思うようだった
らいかにしたらよいか

ご返歌 貞

鳶は鳶雀は雀鷺は鷺鴉と鴉が一緒に連れ立ってどこがへんなので
しょうか

日も暮れたので宿に帰ってまた明日来ましようということ

で(師)

それではこれでわたしは帰りましようあなたはここにゆっくりお
やすみなさいまたあすにしましよう

翌日は早くお出でになられたので 貞

歌を詠みましようか手まりをつきましようかそれとも野外に出か
けましようか師のお気持ちのままにして遊びましよう

ご返歌 師

歌を詠もうか手まりをつこうかそれとも野外に出かけようか心一
つを決めかねることです

※ここにおける、鴉とあだ名されて喜ぶ良寛の感性は、前段の

「蓮の蛙」の歌とも通じているが、自己を客観視して面白がるこ
との出来る、しかしそれは自嘲とはまるで異なる、人を和ませて
くれる資質であり、人に親しまれる所以ともなっているものであ
ろう。また、ここでは、貞心尼とのことで世間の眼を気にする良
寛、それに対し女性らしく腹の座った貞心尼の強さもおもしろく
読み取れる。

○あきはかならずおのが庵をとふべしとちぎり給ひしがここ

ちれいならねばしばしたためらひてなど御せうそこ給はりけ

る中に 師

あきはぎのはなのさかりはすぎにけりちぎりしこともまだとげな
くに

●秋には必ずわたしの庵を訪ねましようとお約束なさいまし

たが体調がおかしくてしばらく様子を見てなどとお便りを

いただいた中に 師

秋萩の花の盛りは過ぎてしまいましたお約束したこともまだ果た
していないのに

※良寛は自らの老いについて鋭い意識を持っており、老いを嘆く歌なども作っているが、貞心尼との関わりの中でもそれは痛切なものとなっている。このときの貞心尼からの返歌は記されていない。

○その、ちはとかく御こ、ちさはやぎたまはず冬になりては
ただ御庵にのみこもらせ給ひて人にたいめもむづかしとて
うちより戸さしかためてものし給へるよし人の語りければ
せうそこ奉るとて 貞

そのまゝになほたへしのべいまさらにはししのゆめをいとふなき
きみ

と申つかはしければ其後給はりけること葉はなくて 師
あづさゆみはるになりなばくさのいほをとくでて来ませあひたき
ものを

●それからはとかくお気持ちに勝れたまわず冬になるとただ
庵にばかりお籠りになられて人に会うこともできないと内
から閉ざしかためていらつしやるように人が話しているの
で、お便りを差し上げるといふこと 貞

そのままになお我慢してくださいいまさらの世のしばしの夢を

たとえ苦しくても厭わないでください師よ

と言ひ送り申し上げたところ、その後それに対し下さった
言葉はなくて 師

春になったら草の庵を急いで出ていらつしやい会いたくてたまり
ません

※ここにおける、貞心尼の歌は却って師を叱るが如くであるが、
彼女としてはこう言っただけで上げるしか無かったのかもしれない、
愛する女性から叱られるのは男としては嬉しいものなのかもしれない。
良寛の返歌はまさに恋歌である。

○かくてしはすのすゑつかた俄におもらせ給ふよし人のもと
よりしらせたりければ打おどろきていそぎまうで見奉るに
さのみなやましき御氣しきにもあらず床のうへに座しるた
まへるがおのが参りしをうれしとやおもほしけむ

いついつとまちにしひとはきたりけりいまはあひ見てなにかおも
はむ

むさし野の草葉の露のながらひてながらひはつるみにしあらねば
かかれはひるよる御かたはらに有て御ありさまを見承りぬ
るにただ日にそへてよはりによはりゆき給ひぬればいかに

せむとてもかくても遠からずかくれさせ給ふらめと思ふに
いとかなしくて 貞

生き死にの境はなれて住むにもさらぬわかれのあるぞかなしき

御かへし 師

うらを見せおもてを見せてちるもみち

こは御みづからのにはあらねど時にとりあひのたまふいとた
ふとし

●このようにして十二月の末のころ急に病が重くなられたこ
とを人のもとから知らせてきたので驚いて急いで参つて会
いもうしあげたところそれほど悩ましいご様子でもなく床
の上に座っておられたのであるが、わたしが参りましたの
を嬉しいと思われたのでしょうか

いついつと待っていた人は来てくれたことよ今はお互いの顔を合
わせて何を思おうか

武蔵野の草葉の露のようにはかない命を承らえていつまでも承ら
えられる身ではないので

このようなことで昼も夜も師のお側に居て御様子を見もう
しあげていたのだが、日に日に弱っていきなされたのでど
うしようどうしたとしても遠からずお隠れになられるであ

ろうと思ふとたいへん悲しくて 貞

生死の世界を離れて仏の道に住む身にも避けられない別れとして
の死別があるのは悲しいことよ

お返し 師

裏を見せ表をみせて散る紅葉よ

この句は師ご自身のものではないが、この場に臨んでの師のお心
に適うものとしておっしゃられたのはたいそう尊いものである

※いよいよ良寛の死とそれを看取る貞心尼の最後の場面である。
人の最期というものは、それが例え誰であつても心打たれるもの
があるが、良寛の場合は、「いついつと待ちにしひと」貞心尼へ
の愛を歌いあげて亡くなるのであり、格別のものが有る。

最後の「うらを見せ・」の句は良寛さんのものではないと貞
心尼は記している。では作者は誰かというそれは明らかでな
い。それで、良寛さんの句として紹介される場合もあるが、私も
この場の良寛の心境を述べたものとしてふさわしい句と理解して
いる。ただ、この句を自然と一体化した禅的悟りの境地を表した
ものとする解釈については、反対するというのではないが、むし
ろわたしは、「あなたには自分のうらも表も全てをさらけ出して
またそれをあなたに受け止め見守っていたきながらあの世へま

います」という、貞心尼への愛のメッセージとして味わいたい
と思っている。

『蓮の露』においてはこの後、「(師の)口ずさみ給ふほつ句
のおぼえたるを」と詞書しての句など、八句を記した後、貞心
尼「くるに似てかへるに似たりおきつ波(打ち寄せて来るよう
でまた引き帰るようでもあるよ沖の波は)」師「あきらかりけりき
みがことのは(おっしゃりたいことはよくわかりますあなたの言
葉は)」とのやり取りを記して、「天保二卯年正月六日遷化よはひ
七十四 貞心尼」と、師良寛の没年と享年を記して結ばれてい
る。時に天保六年、貞心尼三十八歳。良寛の死をつぶさに看取
り、その後六年をかけてその遺作を蒐集整理しここに一本を編む
に至った貞心尼の真情、慕情が切々とその文言手跡に感じ取れ
る。

さて、こうして良寛と貞心尼の歌の唱和を辿っていくと、それ
はそのまま二人の愛の軌跡となつていくことがわかる。歌の唱和
はあるときは挨拶でありあるときは相聞である。これは、わたし
たちの生活の中にある愛の形であり、その意味で唱和という形で
の短歌の共同制作は、もう一度現代において試みられるべき価値
を持っているものと言えるように思う。また、貞心尼の歌につい
ては、少くともこの唱和においては、良寛さんの歌と響き合っ

て、よくその役割を果たしていると言えよう。

後書きに代えて(蓮の露ならぬ庭の薔薇の目に留まりて)
紅薔薇により添ひて咲く白ばらのほのかに赤く染まりけるかな
なお本稿の参考文献として、主なものを記すと、「貞心尼筆
『蓮の露』野島出版」「相馬御風著『良寛百考』有峰書店」「日本
古典全書吉野秀雄校注『良寛歌集』朝日新聞社」「平沢一郎著『良
寛の道』東京書籍」「渡辺秀英著『良寛詩集』木耳社」などである。

平成十八年九月十九日 脱稿

高松大学紀要
第 47 号

平成19年 2月25日 印刷
平成19年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841 - 3255
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町 1 - 8 - 10
TEL (087) 833 - 5811